

日本昔話にみる精神性

千野 美和子

幸福な結末で終わる日本の昔話『たにし長者』と『手なし娘』を取り上げ、グリムメルヘンと比較しながら、その昔話の底に流れる日本人のこころのあり方、精神性を考察する。まず、『たにし長者』では、同じタイプのグリムメルヘンの『ハリネズミのハンス坊や』と比較した。グリムの物語は、呪いの言葉から生れた主人公の呪いをいかに解くかが中心のテーマであり、それは主人公の救済の物語である。それに対して、日本の物語の主人公は祈りから生れた。神への祈りと信仰が中心のテーマであり、信仰による神からの祝福の物語である。そこから、この信仰を支える心のあり方、精神性について考察した。つぎに『手なし娘』では、同名のグリムメルヘンを取り上げ、信仰のありかたの違いについて考察した。グリムのそれは神に対する信仰が強調され、その信仰の証として奇蹟が述べられるのに対し、日本のそれでは、人の心情の交流を中心に物語が展開し、その延長線上で生じた無心の行為に対して奇蹟が語られる。そこから、こころのあり方としての宗教性について考察した。

キーワード：日本昔話、精神性、宗教性

1. はじめに

昔話は、「普遍的無意識的な心的過程の、最も純粹で簡明な表現」と述べたのは、ユング派の高名な分析家のVon Franz (1975)である。ユング派の研究者たちは、こころの深層を探るために、昔話を研究してきた。河合 (1982) は、日本の昔話から、日本人のこころの有り様を論じた。河合は、日本の昔話は、ヨーロッパの昔話と相当異なると述べる。異類婚の一つである動物婿を例に取り上げると、なんらかの事情で主人公である娘が、動物と結婚しなければならなくなるという物語の始まりは、ヨーロッパの代表的昔話であるグリムメルヘンも日本昔話も同じである。しかし、その後の展開と結末は全く異なる。グリムの『歌ってはねる、ひばり』では、娘は動物との継続的な関わりの中、動物は魔法が解けて人間となり、2人はしあわせになる。日本の『猿の婿どの』では、娘は一計を案じ、動物を殺し家に戻る。前者の結末は、娘と動物の関係の持続を通して、動物が人間に変化するが、後者のそれは、関係を断ち切るとともに、動物は人間に変化しない。河合はこの関係の関わりの違いから、日本と西欧の文化の違い、そして日本文化の特質を論じた。確かに、河合の言うように、日本の昔話は人間と異類が出会い結婚という関係が成立するが、何らかの理由で関係が消滅して話が終わるという結末のものが多い。しかし、グリムメルヘンのような結末をもつ昔話もある。いわゆる、関係が継続し、幸福な結末となる。

筆者は、そのような昔話を提示し、その昔話の考察を通して、日本人の精神性（筆者はこれを日本人のこころの底に流れる宗教性といいたい）について考えたい。

2. 『たにし長者』

＜ものがたり＞

子どものいない貧しい百姓夫婦がいた。もう40も越していたが、子どものいないのをなげいて、「わが子と名のつくなら、かえるでもよい、たにしでもよい」と、水神さまにお参りして願をかけていた。ある日、いつものように、ころから水神様に祈っていると、急にお腹が痛んだ。診てもらおうと、子どもが生まれるということだった。夫婦はそれを聞いてたいそう喜び、神棚にすぐ灯明をあげ、子どもが無事生まれるように水神様に祈った。それからしばらくすると、1匹の小さなたにしが生まれた。びっくりしたが、水神様の申し子だからと、神棚に上げて大切に育てた。ところが、20年たっても、タニシの息子は少しも大きくなり、一言も口をきいたことがなかった。ある日、年取った父親は、長者に収める年貢米を馬につけながら、たにしの息子のことをなげいた。すると、たにしの息子が初めて口をきき、父親の代わりに年貢米を長者のところに持っていきこうと言い出した。父親はたいそう驚いたが、水神様の申し子のということなので、そむいたら罰があたるかもしれないとたにしの言うとおりにした。息子がうまく馬を操っていくようすをみて、父親は、急いで家に引き返し、神棚の前にいって、ありがたい子どもを授けてくれたことに礼を言い、子どもが無事に長者の家に着くようにと、夫婦で一心に祈った。長者の所に着いたたにしは、無事に年貢を納めた。それを見た長者は、たにしを家の宝にしたいと思い、たにしに娘を嫁にやると言った。家に帰るとたにしはそのことを親に伝えた。父親と母親は驚いたが、水神様の申し子のということだからと、伯母に頼んで長者の家に確かめに行った。長者は、2人の娘をよんで、たにしのところへ嫁に行ってくれるものはないかと尋ねた。姉嬢は断わったが、やさしい妹嬢は、せつかく約束したことだから、わたしがたにしのところへ嫁に行くと言った。嫁は、父親と母親によく仕え、よく働くので、暮らし向きもよくなった。父親も母親もこれも水神様のおかげだと一生けんめい水神様を信仰した。そのうち、嫁は祭りの見物に行くことになった。嫁はたにしの夫を帯の結び目に入れて、2人で出かけた。2人が薬師様の鳥居の前まで来ると、たにしは、自分はわけあって中に入れなから、1人で詣ってくるように嫁に言い、田の畔に置いてもらう。ところが、嫁が戻ってくると、夫の姿が見当たらない。娘はあちらこちら探し、田の中にも入って泥だらけで探したが、どうしても見つからない。いっそのこと田の中の深い泥沼の中に入って死んでしまおうかと、深みに飛び込もうとした。すると後ろから声をかけるものがいた。振り返ってみると、立派な男が立っていた。娘はこれまでの話をした。すると男は、自分がそのたにしであること、自分は水神様の申し子で、これまでたにしの姿でいたが、娘が薬師様に参詣してくれたので、人間の姿になることができたこと、そして、水神様にお礼詣りをしてここに帰ってきたところだと聞かせた。2人は喜んで一緒に家に帰り、それを見た父親も母親も、知らせをきいた長者もたいそう喜んだ。そして、若い夫婦は商いをして、町一番の長者になり、親類縁者みな繁盛したという。(関敬吾編『こぶとり爺さん・かちかち山ー日本の昔ばなし(1)ー』より)

この昔話は、「むかし語り」の中の「誕生」の＜異常誕生＞の一つ「たにし息子」として分類されている(稲田, 1988)。異常誕生とは、主人公の異常な誕生について語るもので、多くは神に祈って授けられたというもので、いわゆる神の申し子とされるものである(稲田, 1994)。たにしはさざえ、かたつむり、なめくじ、蛙などに変化するが、すべて水に縁のある小動物である(稲田, 1988)。そのため、水神の性格を帯びていたと考えられており、特にたにしは日本全土

に分布して、その棲息地が水田など農民生活になじみの深い所であることから、水の神の指令とみなされてきた（稲田，1994）。分布は、東北から九州まで全国に広がっている。また、同様の話が朝鮮，中国にもあり，ヨーロッパではグリムメルヘンの『ハリネズミのハンス坊や』が同じタイプに属するという（関，1978）。

この話は、『一寸法師』の一つと考えられ、「異形でこの世に生れ，優れた能力を持ち，よき相手を得て幸せな生活をする」（稲田，1994）という話の展開からみるならば，主人公である男の子が不思議な誕生をし，偉業を成し遂げる英雄物語ととらえることができる。そのようにこの昔話をみるならば，ヨーロッパ的な自我の発達の図式にあてはまる昔話の1つとみることができる。異類婚でありながら，たにしは人間となり，二人は幸せになるという展開は，ヨーロッパの昔話の「魔法が解けて人間になる」，「二度目の結婚」というモチーフはないにせよ，同じ展開である。日本の異類婚の場合，その多くは，別れるという結末になることが多い。そして，そのような結末が，非常に日本的であり，日本人の心のあり方を表現していると評されることが多い。しかし，一方では，ここにあげた物語のような幸福な結末を迎える物語も存在する。日本的だといわれる結末の多い中，このような結末が生じる物語をも存在する所以を考えていきたい。

3. グリムメルヘンとの比較

まず，同タイプとされるグリムメルヘンの『ハリネズミのハンス坊や』を取り上げて，比較してみたい。

<ものがたり>

金持ちの百姓の夫婦がいた。子どもがいないことをからかわれた夫は怒って，ハリネズミでもいいから子どもがほしいと呪った。生まれた子どもは，上はハリネズミで下は男の子だった。父親はうんざりして子どもが死んでくれればいいと思っていた。子どもが8歳になった時，父に要求した風笛を持ち，おんどりに乗って家を出ていった。父親は喜んだ。子どもは森で何年も暮した。ある時，森に迷った王が，ハンスに道を尋ねると，ハンスは城に帰って最初に出会うものを自分に与えるなら道を教えると言った。王は約束をしたが実行しなかった。次に森に迷った別の王も同じ約束をした。最初に出会ったのはお姫さまだった。王は悲しんだがその約束を話し，姫も承諾した。ハンスは森で暮らすのがいやになり，父親の元に帰った。父は，ハンスは死んだものと思っていたのに生きていたのがっかりした。ハンスは再び出かけ，最初の王国に行き，うそをついた報いをその王と姫に与えた。二つ目の王国では彼を歓迎し，姫は約束を守って彼と結婚した。晩になって，床に入るとき，彼の指示で，家来たちが，彼の脱いだ皮を火で焼き尽くした。すると彼は救われ，人間の姿になり，美しい若者になった。そして，本当の結婚式が行われた。若者は父の元に行き，自分がハンスであると名乗ると，父は喜んだ。（高橋健二訳『グリム童話全集』より）

共通するモチーフは次の通りである。子どものいない夫婦が，たにしあるいはハリネズミでもいいから子どもが欲しいと言う。するとそのとおりの子どもが生まれる。この子どもは成長して長者の娘あるいは王の娘と結婚する。結婚後，子どもは，人間の姿になる。

通常の異類婚の話は，主人公は人間であり，別個の存在である異類と結婚を通していかに関係をとるかが話の焦点となる。関係をつなぐことによって異類が同類になる西欧的展開と，異類は異類のまま関係を切っていく日本的展開が見られるが，ここでは，主人公である男の子が異類

であることが特徴的である。そのゆえ、まず、主人公の誕生から語られる。その意味で、異類婚のテーマにつながる不思議な誕生のモチーフを持った英雄物語と捉えることができる一方、異類の姿で生まれた主人公がいかに人間となるかという救済の物語とも理解することができる。救済を可能にした展開として、関係を切る形でなく、関係をつなぐ結婚になったということを挙げるができる。その点では父のいうことをきいてやむなしという気持ちはあるものの、娘が喜んで運命を受け入れて結婚することは両方の話に共通している。ここに、父親の価値観に従う父の娘としての問題はあつたものの、いわゆる『美女と野獣』型、すなわち、たにしあるいはハリネズミは人間となり二人の関係は持続するという展開が生じている。

しかし、基本的展開は同じでありながら、物語に流れるテーマと雰囲気はかなり異なる。まず、主人公が誕生するきっかけとなった出来事である。グリムの話では子どもがいないのをからかわれて父が怒って言った言葉から、主人公が生まれる。父の呪いの言葉から生まれた子どもであり、望まれない子どもである。父は負い目があるので、子どもの言う通りにするが、厄介払いできることを望んでおり、できれば死んでくれることを期待している。呪いの言葉から始まるこの物語は、物語が進む中でも、呪いという負のエネルギーが底流で響いている。そのため、この物語の場合、呪いを受けた主人公の救済がテーマとなる。また、家族という視点からみれば、子どもは最小限の世話を受けているが、親から愛情を与えられていないネグレクトという虐待を受けているような状態である。Kast (1986) は家族という視点でこの物語を分析している。子どもは8歳で家を出、1人森で暮らす。その間に子どもは成長する。親から離れ1人森で暮らすというのは子どもから大人になるためのイニシエーションとも考えられ (Bly, 1990)、森がある意味で子どもを守り教えるメンターの役割を果たしたといえる。森に迷ってきた王に約束させる内容は、『美女と野獣』型の物語の展開と同じだが、約束を守らない1番目の王とその姫に報復をすることや、火を用いて皮を焼き尽くす行為も、底流にある呪い(魔法)という負のエネルギーを放ち、かつ浄化するために必要な展開である。この物語は、終始、かけられた呪いがいかに解かれるかがテーマとなっており、心理療法に通ずる (Jacoby et al, 1978)。そのため、幸福な結末に至るまでの暗い側面といかに関わるかが問題となる。

4. 『たにし長者』の底に流れるもの

日本の昔話は、グリムのそれと基本的展開が同じであるにも関わらず、底に流れるトーンが全く異なる。読んでいくにつれてところが解きほぐされ、読み終えた後、ぬくもりのある充足感が余韻として残る。それとともにあつた気持ちが湧き起こるのである。筆者はこの話を読むたびにおきるこの感覚についてずっと考えていたが、それはこの物語の底に流れる精神性ではないかと思う。筆者はそれを「何かを大切に思う気持ち」であると考え、日本昔話のもつ雰囲気について評される言葉があるが、それを超えた何かである。その気持ちは様々な感情によって、揺り動かされ、覆りそうになりながらも、それを持ち続けることができる強さがある。それを探してみたいと思う。

さて、『たにし長者』の始まりは、水神様への祈りの言葉から始まった。その言葉通りの子どもが生まれたのは、グリムのそれと同じである。ところが、それに対する親の受け取り方は全く逆である。グリムの父親はうんざりして死んでくれればよいと願うが、たにしの親は水神様の申し子だからと大切にした。たにしという異形の子どものびっくりしつつも受け入れたのである。そ

ここに存在するのは水神様の申し子、神の授かり物という思想である。この物語では、その思想が最後まで貫かれている。その後、グリムの主人公が8歳という幼さで親から離れたのに対して、この主人公は20年立っても変わらず大きくなり親元にいる。早すぎる分離に対して、遅い自立である。しかし、父親の嘆きをきっかけにして、主人公は動き出す。この時、息子が要求することに対して、父親は「そむいたら罰が当たるかもしれない」という気持ちからではあるが、再び水神様の申し子だからと要求通りする。息子がうまく馬を操る様子を見て、父親は水神様に感謝し無事着けるようにと祈る。祈る行為が続く。

結婚について、長者とその娘とのやり取りは、グリムの王とその姫とのそれと同じである。娘は父のために喜んで結婚を承知した。結婚後のグリムの展開ではそのまま呪いを解く話に進むが、この話ではここから嫁いだ後の娘の様子が語られる。両親によく仕えよく働くので、暮らし向きもよくなったと、両親はいっそう水神様を信心するようになる。娘はたにしの夫と祭り見物に出かけ、薬師様に1人で詣った後、たにしの夫を見失う。娘は自分の着物が泥で汚れるのも気にかげず、夫を探し続けた。ほとんど精根つきで、田の深みに身を投げようとしたその瞬間、人間の姿になった夫が現れる。ここに至るまでの描写は昔話らしくないほどに、娘が必死に夫を探す様子が細やかに語られる。ここまで見ていくと、呪いをかけられた主人公の救済に主眼が置かれていたグリムの話とは異なり、この話は娘の有り様に強調点があるようにみえる。話の始まりは、子どものない夫婦にたにしの子が生まれるという不思議な誕生がテーマであるが、結婚の場面からは親が決めた異類と結婚をする娘が主人公であると言ってよく、結婚後いかに真の出会いにいたるかという女性のこころの成長の物語と理解することができる。グリムの美女と野獣型の『歌ってはねる、ヒバリ』では、2度目の結婚に至るまでに夫を探し続ける物語が延々と続く。Kast (1983)はこのメルヘンを夫婦の間の別離と再会の物語として解釈している。それに匹敵する描写が、たにしの夫を探す娘の様子として語られる。娘がたにしという異類の夫を受け入れその夫と関わり続けることによって起きたことが「たにしが人間となる」という出来事である。

「たにし長者」という昔話について、類似のグリムのお話を挙げて検討してみた。幸福な結末へと繋いでいく幾つかのモチーフが共通していることがわかった。しかし、呪い、あるいは魔法を解くという基本テーマを物語るヨーロッパの昔話とは根本的なところで違っている。それはこの昔話が「祈り」から始まっていることである。神への祈りと信仰が中心のテーマとして貫かれて、グリムのそれのような救済の物語ではなく、信仰による神からの祝福の物語と考えることができる。信心深い夫婦が子どものいないのを水神様に祈り、その祈りによって授かった子どもを「水神様の申し子」として大切に育て、最後には子どもは立派になって、親類縁者みな繁盛したという信仰によって幸福になる物語である。そこには呪いという負のエネルギーを解放するための暗い側面と関わる必要はない。信仰が負のエネルギーを生じるのを防ぐからである。水神様とは水を司る神で田植えをする者にとって身近な存在であったと思われる。その神に支えられ守られ感謝しつつ生きている様子がこの昔話から伝わってくる。この神は、罰が当たるかもしれないと父親が思う程度に力を及ぼす神であるが、西欧の神のように恐れおののく神ではない。むしろ長の年月、人が神に関わることによって、祟り荒ぶる水の神が次第に和らぎ、田の実りを約束し感謝される水神様となり身近な信仰の対象となったと思われる。この昔話から、この信仰を支え続けるこころのあり方、すなわち精神性がうかがわれるのである。その精神性とは、日々の日常を有り難きものとして感謝し大切に思う気持ち（たとえ、たにしの子であろうと天から与えられたものとして受け入れて大切に作る気持ち）であると思う。そのような精神性を貫いたテーマゆえに、

本来の日本昔話にはあまり見られない展開,いわゆる幸福な結末が生じたのではないかと考える。

5. 『手なし娘』にみる宗教性

もう一つここで取り上げたい日本の昔話がある。これは同名のグリムメルヘンの話がある。筆者は、この物語で、西洋と日本の信仰のあり方の違いについて考えたいと思う。

<ものがたり>

仲の良い夫婦がいたが、娘が4歳の時母は死んでしまった。新しい母が来たが、継子が憎くてたまらなかった。娘が15歳になったとき、父は継母の言う事を聞いて、娘を山に連れていき、娘の両腕を切り落として、娘を置き去りにしてしまった。娘は帰る家もなく、谷川の水で切られた腕の傷口を洗って、草の実や木の実を食べて生きながらえていた。あるとき、立派な若者が娘を見つけて家に連れて帰った。若者の母も娘をかわいがり、娘は若者の嫁になった。娘に子どもが生まれることになった。若者は江戸に上ることになり、生まれる子どものことを母に頼んだ。まもなく、子どもが生まれたので手紙を書いて若者の元に早飛脚を立てた。使いの者が水を飲むために立ち寄った家は手なし娘の生れた家だった。継母は使いの持っていた手紙を読み、化け物が生れたという手紙にすり替えた。江戸にいる若者はその手紙に驚いたが、返事を早飛脚に持たせた。使いのものは帰りにも継母の家に立ち寄り、再び継母は手紙をすり替えた。若者の母は子どもとともに娘を追い出すようにという手紙の内容を娘に伝えた。娘はたいそう悲しんだが、子どもを負わせてもらって、母に別れを告げ、泣く泣く家を出て行った。娘は当てもなく行くうちに、喉が渇いてきた。屈んで水を飲もうとすると、背中の子どもの背から抜け落ちそうになった。びっくりして無い手で押さえようとすると、不思議なことに両方の手がちゃんと生えて、ずり落ちる子どもをしっかりと抱き留めていた。一方、若者が江戸から帰ってきて、事情がわかり、母は若者に娘を探しに行かせた。若者はあちこち探し歩いて、流れの側の社まで来た。すると、子どもを抱いた乞食が、神様に一心に祈っていた。後ろ姿を見ると妻に似ているが両手を持っているので不思議に思い声をかけると、手なし娘だった。2人は喜んで泣いた。どうしたのか、涙のこぼれるところには美しい花が咲いた。3人の帰る道の草や木にも花が咲いた。継母と父親は娘をいじめた科で地頭に罰せられたという。(関敬吾編『こぶとり爺さん・かちかち山ー日本の昔ばなし(1)ー』より)

この昔話は「むかし語り」の「継子話」に分類される(稲田, 1988)。国内に非常に広く分布している昔話である(稲田, 1994)。関(1978)によると、この昔話は古くは宗教伝説であったという。また、同名のグリムメルヘンの話があるように、ヨーロッパでも伝承されており、伝承の形式も日本のそれときわめて近いようである。ここまで同じ内容の物語が、日本とヨーロッパ、あるいはそれ以上の地域にも存在するということは驚きに値するが、物語の中で展開するエピソードが人々にインパクトを与えるからであろう。この日本昔話とグリムメルヘンはきわめて類似しており、日本の話以上にヨーロッパのそれも宗教的色彩が濃い。それにも関わらず、2つの話には違いが見られ、この違いに日本的な心のあり方、ひいては宗教的態度のあり方が現れているのではないかと考える。

<グリムメルヘンの手なし娘>

粉ひきの貧乏な男が、森の中で会った老人に、水車の裏にあるものをくれるなら金持ちにしてやるといわれ、承諾する。男は家に帰ってから、水車の裏にいたのは自分の娘で、その老人は悪

魔であったことを知る。娘は信心深い子どもで、神様を敬い清らかに暮していた。悪魔が娘を連れに来ると、娘は身を清めたため、悪魔は手が出せなかった。悪魔が2度目に来たとき、娘は両手をあてて泣いたので両手が浄められていたために、悪魔は男に娘の手を切るように命令し、父はその通りした。しかし結局悪魔は娘をあきらめるしかなかった。娘は自ら家を出ていき、王の庭にやって来た。神様に祈り、天使の助けを借りて、庭に実っている果物を食べて空腹を静めた。王は信心深い娘を妃にした。王は娘を母に任せて戦争に行った。娘は子どもを生み、そのことを母は手紙で知らせた。しかし、信心深い娘に害を加えようと、悪魔が手紙をすり替えて、娘を城にいられないようにした。娘は子どもを連れて、目を泣きはらして立ち去った。大きな森に入ると神様に祈った。すると天使が現れて小さな家に連れていった。その家で、娘とその子どもは神から送られた天使によって親切に世話をされた。信心深いために神様の恵みで切り取られた腕が元のように伸びてきた。戦場から帰ってきた夫は事実をしり、妻子を探して、2人のいる小さな家にたどり着いた。そこで、3人は再会し、母の待つ国に帰った。そしてもう一度結婚式を挙げて楽しく暮した。(高橋健二訳『グリム童話全集I』より)

物語の基本的な展開、すなわち、父に手を切られ手のない娘になってしまうこと、身分の高い男性と結婚したこと、夫の不在中に子どもが生まれ、それを知らせた母の手紙と夫が出した返事の手紙がすりかえられて、娘が家を出なければならなくなったこと、そして、娘の手が生えてきたこと、最後に再会して幸せになったことは、2つの話に共通している。2つの話で大きく違うのは、手を切ることになった理由と手紙をすりかえた犯人である。日本の話の場合、継子話に分類されているように、直接手を下したのは父親であるが、彼にそうさせたのは娘のことが憎くてたまらない継母である。一方、グリムの場合、父親をうまくだまして、命令したのは悪魔である。そして、後に手紙のすり替えをしたのも、前者は継母であり、後者は悪魔である。個人的な父性によって娘が手を切られるのは同じであるが、背後に動く力は、正反対の力である。日本の場合、負の母性であるが、グリムの場合負の父性といってよい。しかも、もっと大きく違うのは、日本の場合負の力を及ぼすのは継母という個人的な母性であるのに対して、グリムの場合悪魔という個人を超えた集合的な負の父性である。

グリムの場合、この悪魔と対比するように、ストレートな形で神、その使いである天使が登場する。この物語は個人的な父の娘がどのようにその父親の価値観の影響から脱して自らの幸せを得るかという女性のこころの成長のプロセスを描いた物語と捉えることもできる(Von Franz, 1977)が、信仰心を持った1人の人間が様々な受難に出あうが、信仰心を捨てずにそれを乗り越えていく、信仰の物語と捉えることもできる。人間の神への信仰に対して、それを試すかのように悪魔が人間を誘惑し、それに翻弄されながらも信仰を失わない人間を神が救う話と理解することができる。また、視点を変えれば、神と悪魔の戦いの物語であり、神が勝利する話とみることもできる。その意味で、グリムメルヘンの中でも、宗教的色合いの強い物語である。

物語の始まりで、主人公の父親はまんまと悪魔の誘惑に負けてしまい、娘を悪魔の手に渡してしまう。娘は自分の清らかさで悪魔から身を守ることができるが、父に別れを告げて家を出ていく。これは、父に捨てられる日本の話と異なり、逆に娘の方が父を見限った行為といえる。娘にとって支えとなり守ってくれるのは個人の父ではなく、精神的な父、天の神である。これからは天の神に支えられて生きていくことになる。まず、神の使いである天使の助けによって飢えをしのぎ、信心深さ故に王の妻になる。この話では娘の信心深さが強調される。ここに出てくる王と王の母も信心深い存在として描かれており、信仰の中で、3人はしあわせに暮す。ところが、王

が戦場に行くという出来事が悪魔の企てを許すきっかけとなる。物理的距離の遠さが、関係をおかしくする要因になる。ここでは、悪魔による手紙のすり替え、つまり意図せぬコミュニケーションの行き違いが生じる。間に立つ王の母はそのおかしさに気づきながらも、最終的に王の命令として受け取り、しかし、娘親子を殺さずに逃がしてやる。城を出た娘が祈ると、再び天使が現れ、2人を助け世話をする。結果的に悪魔の企みは不首尾に終わり、神に守られて暮す信仰生活の中で、この物語の中心といえる無くなった手を取り戻すという奇蹟が生じる。これも、信心深さゆえに神様が生やしてくれたという理由が述べられる。この後、戦争から戻ってきた王が娘を探す遍歴が語られるが、神の加護で2人は再会を果たし、城に戻り、物語は終わりとなる。この話では、終始娘の信心深さとそれによる神への恵みが強調される。このように、グリムの物語では、中心に存在するのは、信仰の対象としての神であり、その神への信仰の物語として話が進んでいく。

それに対し、日本の話では、グリムの話のように、宗教的存在である神や天使、悪魔は登場しない。物語の筋を運んでいくのは、継子が憎いという継母の人情としての気持ちと、その気持ちに同調する父親（この父親の弱さはグリムのそれと匹敵する）である。そして、父の言葉を素直に信じ、山で手を切られ、父から捨てられる弱い娘である。この娘には、グリムの娘にあるような信仰心も、自ら家を出ていく強さも持っていない。しかも、この娘には、飢えを凌ぐのを助けてくれる天使も、家を出た後世話をしてくれる天使もない。ただ、父に見捨てられたことを悲しいと思いつつ、1人で生きながらえていくのである。そして、若者は、父に見捨てられたかわいそうな娘ゆえに家に連れて帰る。若者の母も、心のやさしい人ゆえに娘をかわいがり、嫁にする。日本の物語に流れているのは、神への信仰心とそれに応える神の恵みではなく、若者やその母のかわいそうなものに対しての思いやりのところであり、それを感謝して受け取る娘のところである。つまり、この話の中心として人間の心情の交流が描かれているのである。ここまでの娘は、2人からかわいがられるのみの受け身であったが、最後にこのような言葉を残して家を出ていく。「母さま、このかたわ者のわたしにかけて下されたご御返し一つ出来ないで、出ていきますのは悲しいことだけれども、若さまの心とあればいたしかたありません。出ていきます」。グリムの話の娘はただ泣きはらして出ていくだけであったが、このような思いを述べるとはなんとという強さであろう。父に捨てられたかわいそうな娘はいつのまにか自らの意志を持つ強い女性に変化したのである。この強さは、幸せを剥奪されたことを怨んで他人を攻撃するのではなく、今までの恩を有り難いと感謝しつつこの境遇を受け入れ行動する強さである。この強さは人と人の心情の優しさの中で育った強さである。神と人間という上下の交流でなく、身分の違いはあるかもしれないが、同じ人間としての立場の交流である。同じ立場の者が同じ地平に立って相手のことを大切に思う気持ちからの交流である。そこには、悪魔同様、継母の悪意もつけ入る隙がない。母や若者に対する娘の感謝のころは揺らがないのである。

さて、家から出て娘は行く当てもなく歩いていると、喉が渇いてくる。水を飲もうとすると、子どもが背中からずり落ちそうになる。びっくりして無い手で押さえようとしたその瞬間、両手が生えて子どもを抱きかかえる。日本の話では、このように非常に感動的な場面として描かれている。グリムでは、手が生えてきたのは、信仰深さと神の恵みであると述べられているだけであり、神による奇蹟が強調される。それに対し、日本の話では母が子を思う母性愛を強調するためか、このような場面として手の生える奇蹟が表現されている。しかし、筆者は、母と子の関係に限定せず、また、他人を助けるという目的に限定せず、人間がぎりぎりの状況の中で無我夢中で

行なった行為に対する1つの奇蹟と受け取りたい。そう理解する事によって、この場面が一層普遍的意味を持つと思うのである。グリムのようなはっきりとした神の行為としては描かれていないが、ここに、人間を越えた力が働いていることは確かである。そのため、日本の昔話の類話には、手が生えることに関わって観音や白髪の老人などが現れるという人間を超えた力を人格化する話もみられる(関, 1978)。しかし、多くは川のそばでおきた出来事として表現されている。筆者はこのような奇蹟が生じた場が水のそばであることを強調したい。水というものが聖なるものを表わす存在として奇蹟を生み出す力があると思うのである(千野, 2006, 2007)。この人間を超えた力を神といってもよいが、神という言葉では表現しきれないものが感じられるのである。しかし、筆者はこのような力が作用するという意味において、この物語に宗教性を感じるのである。その後、探しに来た若者は娘にめぐり会う。その時、娘は流れの側の社で祈っていた。この社は流れのそばにあるというところから、水に関わる神である可能性が強い。ここでも、水の神、水神様の関与がうかがわれる。この奇蹟に宗教性としての神の関与がうかがわれるとしても、神を信仰することによって神の恵みを得るという信仰心の証としての奇蹟ではない。つまりグリムの物語のような信仰による証としての奇蹟ではないのである。信仰でなく、その人間が行った行為に対して神が与えた奇蹟である。日本の神は、グリムの神のように、見返りを求めない。それゆえに見返りを求めぬ無心の行為に対して奇蹟が起きるのではないだろうか。そのような行為を、筆者は宗教性をもつ行為といたい。無心というありかたが、宗教的あり方に繋がると思うからである。この意味で、この出来事とこの話全体には、グリムにおける意味での宗教的な物語とはいえないが、根源的なこのころのあり方としての宗教性が存在すると思うのである。この娘にグリムの娘のような神に対する信仰はない。しかし、日々の生活、人との関わりにおいて敬虔な態度を持って生きており、その態度そのものが宗教的であり、その行為やあり方に対して、神の力といえるような人間を超えた力が働き、奇蹟が起きたと思われるのである。そのような宗教的ありかたが存在するのが、この昔話であると思う。

6. 日本人の宗教性

幸福な結末で終わる日本の昔話『たにし長者』と『手なし娘』を取り上げ、グリムメルヘンと比較しながら、その昔話の底に流れる日本人のこのころのあり方、精神性を考察してきた。筆者はこれを宗教性と呼びたい。筆者のいう宗教性とは、既存の特定の宗教についていう言葉ではなく、そのような宗教が生れる元となったこのころの有り様について述べる言葉である。

河合は宗教性についていくつかの著書(河合, 1992, 1997)の中で触れている。筆者も河合の言う宗教性を心理療法のプロセスにおいて最終的に到達する一つのテーマであると考えている。しかし、ここで主張したい宗教性とは、河合が別の箇所(河合, 2006)で触れた次のようなあり方としての宗教性である。すなわち、「理由を超えた存在というものがあって、そのはたらきに対して、畏敬の念、畏れの念をもってそれを見る態度、これが宗教性である」と述べているものである。そして、次のように説明する。日本人はこのような根本的な宗教性を強く持っており、日常生活の中で自然に行っているのだという。その理由について河合は井筒の考え方を使い説明する。井筒の考えとは、分けるということの特徴とする西洋の意識に対し、東洋はつながることの意識を大切にしてきた。それを突き詰めていくと、人間と人間がつながるだけでなく人間と物までつながってきて、区別がなくなり、みんなつながったものを「存在」としか言いよう

がなくなるという。そういう根本的な存在というものがあって、存在を通してつながった感覚で物事を見ることによって、そこから存在に対する畏敬の念が生じてくるのだという。日本の場合、これが根本的な宗教としてあるのでないかと河合は述べる。

また、村上(1997)は異なる視点からではあるが、このような日本人の宗教性について、「お天道様に申し訳ない」「今日様に済まない」という言葉を取り上げて説明する。この言葉は何かの宗教組織から引きだされたものではなく、人間を超えるものに対する素朴な畏敬の念と、そこからくる「慎み」の源泉として、日本人の行動様式の理解のための重要な鍵となる概念であると述べる。そして、著者が体験したエピソードを紹介する。それは、著者の自宅の庭にある井戸を埋めることを職人に依頼したときのことである。その職人は、「神主さん呼んで、お祓いをして貰ってください」という。著者が躊躇していると「牧師さんでもいい」という。そして、「これまで水を供給してくれた井戸への感謝の念と、自分の都合で埋めることを済まないと謝る気持ちを、何らかの形で表わせばいいんです。それが済まないうちは、私は手が付けられません」という。ここに著者は日本の典型的な信仰、すなわち、自然の中に人間を超える超自然的な存在を認めるありかたをみる。日本社会において、人間の欲望を制御する機能(これが宗教の機能であると著者は述べる)を果たし、「慎み」の源泉となり続けてきたのは「今日様」や「井戸への感謝」の発想であるのかもしれないと述べる。

これら2人の論じる日本的な宗教のありかたは、論じる視点は違うものの、同じことを言わんとしている。筆者が、2つの昔話を通じて伝えたい宗教性とは、人間を超えた見えない力の存在を信じ、それに対する畏敬の念をもつこところのあり方である。そして、この畏敬の念とは、他(この他とは、人によらず自分以外のすべてという意味の他である)を尊重し、他に感謝することころであり、いいかえれば、人間の作り出したものを含めての生きとし生けるものに対して大切に思う気持ちである。まさに村上のあげた「井戸への感謝」である。それは罰を与えられるから、または崇られるからという負の理由から生じる感情ではない。その感情は、河合の述べる、つなげて行けば自分と同じ存在としての他者であるという共有感覚から生ずる気持ちである。そして、それは非日常という特別な状況において感じるものではなく、日々の日常生活の中で持ち続ける気持ちである。そのようなこところの根元に存在するのが宗教性である。河合や村上が指摘するように、現代の日本において、このような宗教性を大切にしている意識は薄れてきているのかもしれない。しかし、一方でそのような宗教性を脈々と受け継いで生活している人々や土地が存在していることも確かである。

7. おわりに

心理療法とは、ある意味で、かけられた魔法を解くことである(Jacoby et al, 1978)。本人の意志によらず苦しんでいる症状はいわば魔法がかけられた状態である。その魔法を解くために、クライアントは心理療法の場にやって来るのである。そのように考えると、グリムメルヘンに描かれている魔法にかけられた主人公や登場人物の魔法が解かれていく様子はまさに心理療法のプロセスでもある。グリムメルヘンは私たちに心理療法における『魔法』の解き方を教えてくれる。一方、日本の昔話に魔法は登場しない。それゆえ、魔法を解く必要もない。しかし、そこにグリム同様、幸福な結末や奇蹟が存在する。それが生じたのは、日本的な宗教性である。魔法を解く代わりに存在するのが、この宗教性なのである。その意味で、日本の昔話は宗教に通ずる。ここ

でみてきたような宗教的ありかたによって、奇蹟がおき、人は救われるのである。この宗教性とは、大切に思う気持ち、いいかれば、同じくこの世に生きるものに対しての思いやり慈しむところである。それは人と人だけの関係ではなく、人が生み出した物をも含めて、すべての生きとし生けるものに対して思うところであり、神と言ってよいのであれば、そのところに神は宿っていると思うのである。そのような気持ちが生じるとき、同時に守られているという体験も生れるのである。筆者は、そのような宗教性を回復する場としても心理療法の場が存在すると思うのである。

文 献

- Bly, M., *Iron John*, New York Random House, Inc., 1990 : 野中ともよ訳『アイアン・ジョンの魂』集英社, 1996
- Jacoby, M., Kast, V. & Riedel, I., *Das Böse im Märchen*, Bonz Verlag GmbH, Salzgitter, 1978 : 山中康裕監訳『悪とメルヘン』新曜社, 2002
- Kast, V., *Mann und Frau im Märchen*, Walter Verlag AG, Olten, 1983 : 松代洋一訳『おとぎ話にみる男と女』新曜社1985
- Kast, V., *Familien-konflikte im Märchen*, Walter-Verlag AG, 1986 : 山中康裕監訳『おとぎ話にみる家族の深層』創元社, 1989
- 河合隼雄『昔話と日本人の心』岩波書店, 1982
- 河合隼雄『心理療法序説』岩波書店, 1992
- 河合隼雄「宗教と宗教性」, 河合隼雄・村上陽一郎編『内なるものとしての宗教』225-243, 岩波書店, 1997
- 河合隼雄他『日本の精神性と宗教』11-54, 創元社, 2006
- 稲田浩二『演習版・日本昔話タイプ・インデックス』同朋社出版, 1988
- 稲田浩二他編『(縮刷版) 日本昔話事典』弘文堂, 1994
- 村上陽一郎「日本の文化的基盤と超越的存在」, 河合隼雄・村上陽一郎編『内なるものとしての宗教』1-17, 岩波書店, 1997
- 関敬吾編『桃太郎・舌きり雀・花さか爺ー日本の昔ばなし(Ⅱ)ー』岩波書店, 1956
- 関敬吾『日本昔話大成台第3巻』角川書店, 1978
- 千野美和子「水のイメージ」『仁愛大学研究紀要』第4号25-35, 2005
- 千野美和子「昔話にみる水のイメージ」『仁愛大学研究紀要』第5号99-108, 2006
- 高橋健二訳『グリム童話全集Ⅰ, Ⅲ』小学館, 1976
- Von Franz, M.-L., *An Introduction to The Psychology of Fairy Tales*, Spring Publications, 1970 : 氏原寛訳『おとぎ話の心理学』創元社, 1979
- Von Franz, M.-L., *Das Weibliche im Märchen*, Bonz Verlag, Stuttgart, 1977 : 秋山さと子・野村美紀子訳『メルヘンと女性心理』海鳴社, 1979